

わたしを憐れんでください

——バルティマイの叫び

マルコによる福音書 10 : 46 - 52



司祭 ヨハネ 井田 泉

2024年10月27日

聖霊降臨後第23主日

京都聖三一教会にて

聖書の中にはたくさんの方が登場します。その中には繰り返しその名前が出てくる人がいます。例えばペテロ（ペトロ）。ふと気になったので新共同訳聖書で何回出てくるか数えてみました。するとペテロは 201 回です。

その反対にその名前が 1 回しか出て来ない人もいます。今日の福音書のバルティマイもここだけ、このマルコ 10 章 16 節に 1 回だけです。同じ物語はマタイ福音書にもルカ福音書にも記されていますが、そこには名前はないのです。エリコの町で、道端に座って物乞いをしていた盲人バルティマイ。このバルティマイに今日は関心を向けてみることにしましょう。

ところでこのバルティマイとわたしたちには、共通していることがあります。わたしたちというのは、今日このように聖餐式と一緒にささげているわたしたちです。何かと言うと、バルティマイとわたしたちは同じ呼びかけを、同じ祈りを、イエスに向かってしている。気づかれたでしょうか。先ほど一緒に唱えた言葉です。

「主よ、憐れみをお与えください」「キリエ、エレイソン」

今日のマルコ福音書を初めから読んでみましょう。

「一行はエリコの町に着いた。イエスが弟子たちや大勢の群衆と一緒に、エリコを出て行こうとされたとき、ティマイの子で、バルティマイという盲人の物乞いが道端に座っていた。

ナザレのイエスだと聞くと、叫んで、『ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください』と言い始めた。多くの人々が叱りつけて黙らせようとしたが、彼はますます、『ダビデの子よ、わたしを憐れんでください』と叫び続けた。』10:46-48

イエスよ、わたしを憐れんでください。

この呼び求め、この祈りを、わたしたちはバルティマイと共有しているのです。

「主よ、憐れみをお与えください」。もしわたしたちが、ただ祈り書にそう書いてあるからそう唱えている、というだけなら、バルティマイとわたしたちの関係は言わば形式的なものです。けれどもわたしたちが、バルティマイのように、ほんとうに助けを、救いを必要としていて心からイエスに呼び求めるなら、この聖書のバルティマイは、わたしです。彼の中にわたしがいます。

ここでわたしの個人的なお話をするをお許してください。1977年、と言うともう今から47年も前のことです。神学校を卒業する直前、わたしたち同級生5名で卒業旅行と称して水戸に行きました。偕楽園で梅を見たりしました。日曜日、水戸聖ステパノ教会に出席しました。日曜学校をやっていて、神学生が来たというので、だれか話をせよと言われて、なぜかわたしがそれに当たって子どもたちにお話をした覚えがあります。

その後、聖餐式に参加しました。青木春生という先生が司

式・説教されました。それがちょうどこの聖書の箇所だったのです。

バルティマイは必死でイエスを呼んだ。イエスは彼を招かれた。それでイエスはバルティマイに言われました。「何をしてほしいのか」。彼は言いました。「先生、見えるようになりたいのです」。

当時のわたしは、実は神さまを見失っていたのです。神学校に入学して数ヵ月して、今で言ううつ状態になり、それが続くうちに神さまがわからなくなってしまった。イエスさまが見えなくなってしまった。そういう状態がずっと続きました。卒業直前になってもその状態は回復せず、まもなく卒業して教会に赴任しなければならないのに、もう任地も決まっているのに、わたしは神さまのことが確信できない。恐ろしくて、不安でたまらない毎日でした。そういう中でこのバルティマイの説教を聞いたのです。

「何をしてほしいのか」。

「先生、見えるようになりたいのです」。

わたしも見えるようになりたい。わからなくなった神さまがわかるようになりたい。見えなくなったイエスさまが見えるようになりたい。他のことは何もいりませんから、信仰の目が開かれて、見えるようになりたいのです。わたしは説教を聞きながらバルティマイの呻くような求めがわたし自身の呻き求めと

感じて、涙が止まりませんでした。

わたしのそのような見えない状態、不信仰の状態は、決定的な回心が起こって解決するかと期待したけれどもそうはならなかった。それから1年、2年と非常にゆっくりと時間をかけて癒やされていきました。そのようなわたしが司祭に按手されるに至ったのは奇跡としか思えません。それから40数年、ここでこうして皆さまと一緒に礼拝しているのも奇跡です。神さまと多くの人々にいくら感謝しても足りません。

聖書の続きです。

「そこで、イエスは言われた。『行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。』盲人は、すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。」10:52

このようにバルティマイはイエスによって目が開かれたのですが、ここでイエスが彼に「行きなさい」と言われました。「自分の行くべき道を行きなさい」と言われたのでしょうか。わたしについて来なさいとは言われなかった。けれどもバルティマイにとっては、これから自分の行くべき道は、他にはなかった。いま生涯にただ一度出会ったこのイエスに、従って行くより他に考えられなかったのです。彼は「なお道を進まれるイエスに従った」とあるとおりです。

なお道を進まれるイエス。その道はどこに続くのでしょうか。エルサレムです。その後すぐに 11 章でイエスはエルサレムに入り、大勢の人々に歓呼して迎えられます。

**「ほめたたえよ、主のみ名によってこられる方を
いと高きところにホサナ」**

これも聖餐式の後半で一緒に唱える言葉ですね。詩編 118 編から来ています。

しかしこのあと事態は急転し、イエスは捕らえられ、裁判にかけられ、死罪を宣告されます。群衆は「十字架につけろ」と叫び立てました。そのとき、あのバルティマイはどこにいたのでしょうか。きっとその群衆の中に混じっていたのではないのでしょうか。この方は何も悪いことをしていない。わたしの目を開いてくれた。十字架につけられるいわれはない。彼は、心の中でそう叫んでいたのではないのでしょうか。けれども多数の力が支配するところでは無力でした。

しかしそれで終わりではありませんでした。イエスは復活して、イエスを信じる多くの人々に現れてくださいました。名前は記されてはいないけれども、きっとイエスはバルティマイにも現れてくださったと信じます。

多くの人がバルティマイのことを忘れても、イエスだけは彼のことをお忘れにはならない。

今日、使徒書でこう聞きました。

「神は不義な方ではないので、あなたがたの働きや、あなたがたが聖なる者たちに以前も今も仕えることによって、神の名のために示したあの愛をお忘れになるようなことはありません。」ヘブライ人への手紙 6:10

神はあなたがたの働きや愛をお忘れにならない。イエスは、バルティマイのあの必死の求め、イエスに対する信頼と愛をけっしてお忘れにならないのです。

バルティマイとともに「イエスよ、主よ、憐れんでください」と祈るわたしたちのことを、イエスはけっしてお忘れにならない。わたしたちの信仰を、わたしたちのささやかな愛の働きを、神は、イエスは、尊いものとしてご覧になり、けっしてお忘れにならないのです。

お祈りします。

主イエスさま、あなたはバルティマイの願いを聞かれました。わたしたちも願います。どうかわたしたちの信仰の目を開いて、あなたのことをもっとはっきりと見るができるようにしてください。そしてあなたに従い行くようにしてください。アーメン